

手銭家蔵『瑠璃壺百首』翻刻と紹介

野 本 瑠 美
(島根大学法文学部)

摘 要

手銭家が所蔵する、天神に作者を仮託した百首歌『瑠璃壺百首』を翻刻、紹介する。

キーワード：菅原道真、天神、天神仮託歌集、百首歌、手銭記念館

一、作者を「天神」とする歌集

出雲市大社町の手銭家が所蔵する『瑠璃壺百首』は、天神(菅原道真)を作者とする百首形式の作品(百首歌)の一種である。

平安中期の官人で漢詩人としても著名な菅原道真(八四五～九〇三)は、『古今和歌集』以下の勅撰集に入集する歌人でもあった。だが、家集は現存せず、「筑紫にて：折々の歌書きおかせたまへりけるを、おのづから世に散り聞えしなり」(『大鏡』時平伝)や「道真公所レ詠歌集曰「菅家御集」。有二一巻」(『菅家御伝記』)などの記述(注1)によって、その存在がうかがい知られるばかりである(注2)。藤原定家(一一六二～一二四一)自筆の『集目録』には「菅家」という

家集が見え、鎌倉期に道真の家集が存在していたらしいが、その実態も不明である(注3)。

一方で、中世から近世にかけて、道真とは全く別人の詠作を収載しながら、作者を道真に仮託する家集や百首が流布した。これらの家集・百首は、道真の勅撰集入集歌を含みつつも、後代の他人詠を数多く含む上、詠者を神格化した道真、すなわち天神に仮託しているため、「天神仮託歌集(注4)」(以下、「仮託歌集」と略称する)と呼ばれる。「仮託歌集」の伝本は膨大な数にのぼる上、複数の歌集が合写されて一書を成していたり、同じ書名であっても所収歌が全く異なる場合もある。「仮託歌集」は天神の詠歌の集成であるが、このような特定の神の詠歌を収集し、かつ多種多様なバリエーションの歌集が生み出されるのは天神をおいて他にはない。

天神信仰に関わる研究は、文学研究の範疇にとどまらず、宗教・思想・歴史・民俗学等の諸分野に跨がる広範な成果と蓄積(注5)があるが、「仮託歌集」の研究はそれらに比して多くはない。一九六二年刊行の『和歌文学大辞典』(明治書院)に「仮託歌集」のうちの数点が立項され、自身でも仮託歌集を収集した(注6)山岸徳平氏の解説によって基礎的な情報が知られるようになったが、「仮託歌集」研究の画期は、武井和人氏(注7)によって「仮託歌集」の系統分類が示されたことである。定家自筆『集目錄』所載の「菅家」を出発点に、存在したはずの「道真家集」を追究した武井は、伝存する「仮託歌集」を網羅的に調査し「仮託歌集」の全体像を初めて示した。その後、小峯和明氏を中心とした研究グループが、法華経の注釈に天神の詠歌を付した『妙法天神経解釈』の注釈と研究(注8)を進め、その過程で新たな伝本も含めて「仮託歌集」を再調査し修正した系統分類を示した(以下、この注釈を『全注釈』と呼ぶ)。

「仮託歌集」の成立については、現段階では不明な点が多い。奥書・識語類から武井氏は室町末期を成立下限とし、一六五〇年頃を境に急速に流布したと指摘する。『全注釈』解説(注9)では、室町末期頃から続々と生み出されていく、とする。武井氏は「仮託歌集」を「和歌史の表舞台に出る」作品ではないと断りつつも、「中世和歌史を叙述する上で、欠くべからざる資料」と位置づけ、「より一層の伝本の博搜と、完璧な校本の作成、出典の網羅的な調査、それらに基づく総合的な考察」の必要性を訴えた。以後、『全注釈』を始め、新たな伝本の紹介や「仮託歌集」の内容や享受に関わる研究(注10)が進められている。今回新たに天神仮託百首の一本が発見されたため、ここに紹介し、今後の研究の一助としたい。

二. 手銭家蔵『瑠璃壺百首』

手銭家所蔵の『瑠璃壺百首』は、袋綴の写本一冊で、貝原篤信の教訓書『楽訓』(中巻のみ)と合写されている。詳しい書誌は次項に記すが、見返しや、『瑠璃壺百首』の後に和歌や狂歌等が書き入れられている。『瑠璃壺百首』、『楽訓』、これらの書き入れは全て同一の手とらしい。奥書・識語等はないが、書写年代は江戸末期であろう。

手銭家『瑠璃壺百首』の所収歌数は九十九首、巻頭歌は「月だにももらぬ深山の下柴にいつふる雪のまだ残るらん」。本文系統は、武井氏の分類によれば丙系統、『全注釈』分類ではd系統に該当する。

丙系統(d系統)の百首は、尊経閣文庫本、国立歴史民俗博物館蔵旧高松宮家本、岡山大学附属図書館池田家文庫本等、現在二十二本ほどが知られている。ただし、同じ系統であっても、外題・内題等は様々で、歌順等も大幅に異なる場合が多い。以下、参考として武井氏が翻刻紹介した同系統の百首(尊経閣文庫蔵「菅家御詠」(二三・一八)との歌順を対照させた表を次頁に掲げる。尊経閣文庫本に見られない歌については、同氏による「同じ系統に属する諸本による補遺」で付された記号を掲げた。

手銭家本 歌順	初句(二句)	尊経閣本 歌順	手銭家本 歌順	初句(二句)	尊経閣本 歌順
1	月だにも	1	50	夢さそふ	34
2	ふりそはば	2	51	名にさける	76
3	霞つも	3	52	松かぜの(かすみのまどを)	77
4	いにしへの	4	53	月のきる	78
5	佐保姫の	5	54	鐘の音を	32
6	咲そへば	72	55	いつの世の	33
7	宵の間に	73	56	よし心	44
8	ちる花を	84	57	はり初る	45
9	散ままに	6	58	百色の	46
10	朝ぼらけ(沖漕ぐふねは)	85	59	あづさ弓	47
11	ひたすらに	86	60	山人の	27
12	花をうし	87	61	降つみて	28
13	かたりてや	7	62	行末も	29
14	春もはや	8	63	世の中の	100
15	吹よはる(風をうづみて)	9	64	心こそ	30
16	誰かたを	69	65	ことほりを	31
17	たかせ山	53	66	へだてつる	21
18	ふけばこく	70	67	をのづから	22
19	明わたる	71	68	はらはらと	24
20	さそわれて	58	69	常磐木と	25
21	すててこし	59	70	吹ほどは	26
22	吹よはる(風よりはるる)	60	71	浦ざとは	15
23	人のもつ	61	72	影うつす	16
24	影ふかき(月を山路に)	62	73	中々に	17
25	朝ぼらけ(濱名の橋は)	52	74	老て聞ば	18
26	かげふかき(夕日の余波)	54	75	しるべせよ	19
27	しら波の	55	76	終夜(ひかぬ鳴子の)	20
28	ともすれば	56	77	吹あげて	88
29	旅衣	57	78	五月雨の	10
30	ながらふる	41	79	藻しほやく	11
31	むらさきの	42	80	夏もなを	12
32	うき事や	49	81	泣ぬらす	13
33	うき世をば	43	82	山の端に	14
34	松風の(聲をばいかで)	50	83	武士の	91
35	みよし野の	51	84	枝にふる	92
36	山あひの	35	85	しぐれても	97
37	里までは	36	86	峰にふる	イ
38	行水の	37	87	風わたる	93
39	明ぼのの	38	88	もろこしを	94
40	川音は	39	89	面影は	64
41	富士の根に	79	90	降る雨は	65
42	不二の根は	40	91	更にけり	66
43	ひとつ山の	80	92	深き夜に	67
44	よそにては	81	93	落椎は	68
45	春の夜の	48	94	我影は	マ
46	花染の	74	95	布引を(さらしな山の)	95
47	たてぬきに	75	96	布引を(おりたつ瀧の)	ワ
48	玉くしげ	82	97	おとしも	96
49	水鳥の	83	98	夜もすがら(嵐に窓を)	23
			99	磯山も	98

〔表〕

手銭家本の所収歌は、歌の配列自体は異なるものの、尊経閣文庫の所収歌と九十六首が一致する（ただし、歌本文に異同はある）。手銭家本は、尊経閣文庫本の「わすれてはたそといひけり夜もすがら嵐のた、く柴の戸ほそを」（六三三）、「我にまたのこる命のつながれてこ、ろの馬に身をぞのせたる」（八九）、「太山より木々の梢をつたひきて一こゑになる庭の恣かぜ」（九〇）、「吹分て松の木のみをもる月のくもるやかぜの絶まなるらん」（九九）の四首を欠き、尊経閣文庫本に見られない三首（八六・九四・九六）を収める。ただし、この三首は同系統の他本で確認できるものである。

手銭家本の外題・内題に記された「瑠璃壺百首」という名称は、天神仮託百首に幾例か見いだされる。この「瑠璃壺」という名称について、渡辺麻里子氏（注11）が詳述しているので、その要点を以下にまとめておく。それによれば、「瑠璃壺」とは、仏舍利などを入れるのに用いる壺や薬師如来の手のひらに乗る薬壺を表し、この名称には天神を信仰し、加護を願う思いが込められているという。また同氏は、狩野文庫本に記された、道真が筑紫配流の際に携えた瑠璃壺に自詠百首を納めたという由来譚を紹介している。手銭家本には、このような由来譚等は付されていないが、天神信仰を背景とする書名であることが想像されよう。

手銭家本の見返しと、『瑠璃壺百首』の後（四丁裏）に和歌等の書き入れがあるが、万葉集や草庵集、風雅集等の和歌や、狂歌、川柳等であり、内容上の繋がりはうかがえない。ただし、iは徳島藩の儒学者・佐野之憲（一七五〇―一八一九）の歌、①は鯛屋貞柳（一六五四―一七三四）、②は混沌軒国丸（一七三四―一七九〇）の狂歌のため、合写されている『楽訓』（初版一七二一年刊行）と併せ、書写年代の

参考にはなろう。

〔注〕

〔注1〕『大鏡』は日本古典文学全集、『菅家御伝記』は群書類従（第二輯・巻二〇所収）より引用した。

〔注2〕武井和人「道真仮託家集・百首研究序説」（『中世和歌の文献学的研究』笠間書院、一九八九年）により、『新古今集』巻十八・雑下巻頭「菅贈太政大臣」による十二首の一字題詠や、冷泉家時雨亭文庫蔵『集目錄』の「菅家」という記載から、『新古今集』の撰集資料となり得たような家集が想定されている。ただし、この家集は道真真詠とは認めがたいという。その後の研究に、有吉保「撰者と資料―巻十八雑歌下・道真詠歌の場合―」（『新古今和歌集の研究 続篇』笠間書院、一九九六年）、浅田徹「菅原道真の新古今入集歌おぼえがき」（『早稲田本庄高等学院国語科論集』創立二十周年記念特別号、二〇〇三年三月）、久保木秀夫「道真集」（『中古中世散佚家集研究』青簡社、二〇〇九年）など。

〔注3〕注2久保木論考

〔注4〕注2武井論考など、先行研究では「道真仮託家集・百首」や「道真仮託歌集」などと呼ばれることが多い。渡辺麻里子「嵯山元賢の天神信仰―道明寺天満宮蔵『瑠璃壺之詠歌百首』をめぐって―」（『黄檗文華』122、二〇〇三年七月）では、歌集の性質から「天神仮託歌集」と称するのがふさわしいとする。

〔注5〕貝原篤信（益軒）による『太宰府天満宮故実』（貞享二年（一六八五）刊）を筆頭に、太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』上・下（吉川弘文館、一九七五年）や真壁俊信『天神信仰史の研究』（続群書類従完成会、一九九四年）、河音能平『天神信仰の成立―

日本における古代から中世への移行」(埴書房、二〇〇三年)、武田佐知子編『太子信仰と天神信仰―信仰と表現の位相』(思文閣出版、二〇一〇年)ほか多数。小峯和明編『宝鏡寺蔵『妙法天経解釈』全注釈と研究』(笠間書院、二〇〇一年)所収の「参考文献一覧」参照。久保貴子「山岸文庫蔵『菅原道真家集類』に関する一考察」(『実践国文学』40、一九九一年九月)に詳しい。

(注7) 注2武井論考

(注8) 注5小峯編著書

(注9) 注5所収、安原眞琴・渡辺麻里子「『妙法天経』の和歌」

(注10) 新たな写本を紹介したものとして、注6のほか、飯塚ひろみ・三浦喜子・吉海直人「道真仮託歌集『菅家御集』の翻刻と紹介」(『同志社女子大学日本語日本文学』18、二〇〇六年六月)、飯塚ひろみ・芝万智・吉海直人「道真仮託歌集『聖廟御詠』の翻刻と紹介」(『同志社女子大学日本語日本文学』20、二〇〇八年六月)、妹尾好信「菅原道真仮託歌集『瑠璃壺之詠歌百首』(架蔵・卷子本)―翻刻と解題―」(『広島大学大学院文学研究科論集』79、二〇一九年十二月)などがある。

(注11) 注9

三、書誌と翻刻

書誌

手銭家所蔵 写本袋綴一冊

(函架番号) 六六二

(表紙) 二四・六×一七・二種。本文共紙。

(外題) 表紙左に直書き「瑠璃壺百首／楽訓上中下」(／は改行を示す)。「璃」は「理」の「里」を消し、右傍に「离」と書く。

手銭家蔵『瑠璃壺百首』翻刻と紹介(野本瑠美)

(内題) 瑠璃壺百首

(丁数) 四丁

(合集状況) 貝原篤信「楽訓」(中巻)と合。「楽訓」含め全三十一丁。(備考) 一面十五行、和歌一首一行書き。表紙に蔵書印が二種類見えるが、印文不鮮明のため解読できない。表紙見返しと四丁裏に和歌等が書き入れられている。

凡例

- 一、翻刻の字体は可能な限り原本どおりとした。ただし文字の大小・字配りは必ずしも忠実ではない。
- 一、便宜上、各歌の冒頭に通し番号を付した。「瑠璃壺百首」には算用数字、表紙見返しの歌にはアルファベット、四丁裏の歌等には丸数字を用い、区別した。
- 一、改行位置は可能な限り原本の通りにした。原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、()内にその丁数および表裏(オ・ウ)を示した。
- 一、ミセケチ記号は「ヒ」で示した。
- 一、朱筆による書入は翻刻の後に(朱)と示した。
- 一、墨消ちは、下の字が判読可能な場合は二重線で示し、判読不能な場合は■で示した。傍記や補入、空白箇所については、可能な限り原本の体裁を残すよう翻刻した。
- 一、割書は()に入れ、改行位置を / で示した。
- 一、傷みなどで判読が困難な箇所は□で示した。

翻刻

瑠璃壺百首

- 1 月たにももらぬ深山の下柴にいつふる雪のまた残るらん
 2 ふりそは、ふかくはならて中／＼に下よりきゆる春の淡雪
 3 霞つも月やあらぬとおもふより我身ひとつの泪なりけり
 4 いにしへの春のならひに見し月のなみたの霞む老は来にけり
 5 佐保姫のかさしのかつら永き日のうきかけて社花は見えけれ
 6 咲そへはそれとも見えすかつらきの花のよそなる峯のしら雲
 7 宵の間に咲そふ花の雲見へて川上かすむ明かたの空
 8 ちる花を薪のうへに吹かけて嵐をもたぬ山人はなし
 9 散まゝに青葉は茂る深山邊の梢やうすき花のしら雪
 10 朝ほらけ沖漕くふねは見えもせて霞にうかふ浦の松原
 11 ひたすらに嵐をうしと岩橋や明不間にこそ花は散けれ
 12 花をうしあらしもつらしもるともに散れはそ誘ふさそへはそ散る
 13 かたりてや家つとにせん一枝も折をゆるさぬ花は帰るさ
 14 春もはやす糸になるほのあまりなと恨をそそへ花の散らん」
 （1オ）
- 15 吹よ■る風をうつみて木陰より外にはふらぬ花のしら雪
 16 誰かたをわきてあるしと思らんなか垣に咲梅のはつ花
 17 たかせ山ふもとほくらき曙のきりのうへ行秋のたひ人
 18 ふけはこくよはれはうすき梅か香のあらしにかはる夜半の手枕
 19 明わたる志賀の濱松ほの／＼とさ、波かけて立霞かな
 20 さそわれて此山までは月にきつさのみはいか、夜も更にけり
 21 すて、こし身にともなは、月にきつむかしの秋を忘れさる覧
 （2オ）
- 22 吹よはる風よりはるゝむら雨のよは定なき物としらすや
 23 人のもつ薪のうへの雪を見て山の寒さをおもひ社やれ
 24 影ふかき月を山路に踏分て下は幾重の木の葉なるらん
 25 朝ほらけ濱名の橋はと絶して霞を渡る春の旅人
 26 かけふかき夕日の余波浪染て紅たゝむ八重の汐風
 27 しら波のうち驚かす岩の上にねひらて松の幾世経ぬらん
 28 ともすれは身のうき波のあやめ草ひかれやすきそ心なりける
 29 旅衣木の根の枕松の風いく夜なれてか夢はみてまし」
 （1ウ）
- 30 なからふる身はうき草の根を絶て鳴ぬ間はなし水鳥の聲
 31 むらさきの萩の戸明て野をみれば花なき村も藤つほの秋
 32 うき事や心の秋となりぬらん花ちりかへる小田の苗代
 33 うき世をは秋の山風聞しとて雲こそ月の隠れ家となれ
 34 松風の聲をはいかて埋むへきつもらてそふる月のしら雪
 35 みよし野ゝさくらをうみとみつ汐に花のみるめをかつく山人
 36 山あひのあしたの雲は海に似て波かと聞は松風の音
 37 里まではふりもくたらぬはつ雪を筏にのせてくたる柚人
 38 行水の中の小島の川柳浪やもてきてこゝにうへ劔
 39 明ほの、いつくさかひとかすむらん花のあなたの峯の松原
 40 川音は雪きえしよりとたへして風のかけたる花の浮はし
 41 富士の根に立そふ雲やなひく覧さのみはいか、煙なるへき
 42 不二の根は雲より上にかけてふもとの月になる沢の水
 43 ひとつ山のならへるはみな麓にて雲よりうへにあまる不二の根
 44 よそにては音に聞へしあしからの富士にならへは麓なりけり」
 （2オ）

45 春の夜の月の浮舟かけ出て風の音する松の藤なみ
 46 花染の霞の袖は成に鳧雲のころものさくら色にて
 47 たてぬきに雲の色糸引はへて霞の衣風やおるらん
 48 玉くしけ箱根の宮居かくれなく明るも寒し月の湖
 49 水鳥のはやきなかれにさそはれて絶ぬる音の遠さかり行
 50 夢さそふ軒はの萩の風の音たか植置しねさめ成らん
 51 名にさける梅津の里のいかなれや風は吹とも匂はさらなん
 52 松かせのかすみのまとを明る夜に月さへ匂ふ梅もなつかし
 53 月のきる霞の衣ほころひて花のかたへそ雲なひくらん
 54 鐘の音をまたも夢の覚ぬるはしらぬ老や近つきぬらん
 55 一つの世のいつの時にかかたるへき命そ人のはてはしるらん
 56 よし心おもひも出て捨てこし身のかへるへき昔ならねば
 57 はり初る花の木の間の春風にいてつる月や朧なるらん
 58 百色の木々にまきれぬ花咲て鳥のなかも鶯の聲
 59 あつさ弓柳のいとも花咲ている月影そかすみうこかす
 (2ウ)

60 山人の袖も新も埋れて雪こそくるれ谷のほそ道
 61 降つみて舟とも見えぬ松陰に雪をそつなく浦の蟹人
 62 行末もいそかれなからともすれは都にかへる我心かな
 63 世の中のうきはならひといふ人やいとほしとての心なるらん
 64 心こそかわらすとてせめて世にしられぬ程の山里もかな
 65 ことはりをよそになしてはしる人の我身のとかなとまよふらん
 66 へたてつる竹を一むら降しきて隣を見する雪のあけほの
 67 をのつかから木陰につもる落葉社風のとりたる薪なりけり
 68 はら／＼と霰ふる屋の板ひさし苔むすかたは音も聞えず
 69 常磐木と何おもひけん是ほとに雪の花咲松の枝さし
 70 吹ほとはそれと聞へし聲絶てあらしを埋む雪のまつ風
 71 浦さとは波のよる／＼汐汲て月をになふは秋の海士人
 72 影うつす波をいそへに吹よせて月もきしうつ秋風の音
 73 中／＼にふきしく時は音絶てよはれはそよく萩の葉の風
 74 老て聞はいか、うからんにしへのを思はぬたにも萩の上風
 (3オ)

90 降る雨は雲より上のなかれにて嵐にはしる月の浮舟
 91 更にけり高根をおろす秋の風月の姿そ雲の下なる
 (3ウ)

- 92 深き夜にまた波を聞淡路かた月落て社海としらるれ
- 93 落権権は朱はあらしを残す車にて秋のもの見は月の深山路
- 94 我影は残るいのちにつなかれて心の駒に身をそのせたる
- 95 布引をさらしな山の白雨に雲の衣はあらはれにけり
- 96 布引をおりたつ瀧の音ながら卯の花さらす月の玉川
- 97 おと、しも去年も今年も咲花のその日散きと誰かしらまし
- 98 夜もすから風に窓をたゝかれてあくれば庭の木葉也けり
- 99 磯山もみねの松風通ひ来て波やひく覧うらことの音」
(4才)

〔見返し 書入〕

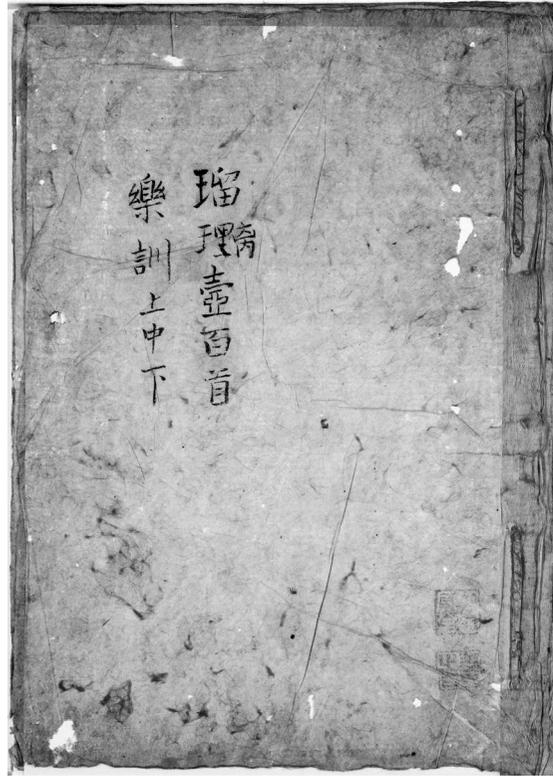
- a 浪のよるいらこか崎を渡る舟はやこきよせよしまきは風の名也
- 〈又読志高業□□／海邊の風也〉
- b ひとへのみ妹かむすひし帯をすら三重にゆふへく我身はなりぬ
- c あぜをこすなはしろ水の程見えて道のぬかりはかはく間もなし
- d はれやらぬ雪けなからにまきもくのひはらくもりて立霞哉 頓阿
- e 夜思花 よるはなを我身にぞそふ暮るまで木すゑに見つる花の面影
- f 七夕 遠きいもと手枕やすくねぬる夜は庭鳥なくなあけはすくと
も 赤人
- g 春の夜のゆめのうきはしと絶して峯に別る、横雲の空 定家
- h 忍恋 よそなからふくにつけて中くにおもふ心をもらしかね
つ、 頓阿
- i 見る文に見ぬ世の人をてらし見る月のとほそのさしもやられす
佐野之憲

〔4丁ウ 書入〕

- ① 一にたはら似合ぬ俚哥賛にして大黒舞のもふおかしかな 貞柳
大黒賛
- ② 見ならへよ肩には袋手には槌米まで踏てかせき給ふを 国丸
人丸賛
- ③ おそれながら郭公待つ神の顔 白物
- ④ 年の暮歳旦安ふ入れませふ〈宗匠衣着て／念箱持て歩行統を立
て〉
- ⑤ 六十で躰毒出たぐけ千代の春 六十の年かさを病て
- ⑥ しろかねのめぬきのたちをさげはいてならの都をねるは誰か子そ
世の中をうしとやさしとおもへともとひたちかねつ鳥にし有ねは
- ⑦ しろかねもこかねも玉も何せんにまされるたから子にしかめやも
- ⑧ 里の子の権ひろいとむれてさそふいなにはあらず此老らくも 長嘯
- ⑨ おしめ人むへもいひけり時と日のまでてふ事を聞はこそあらめ
- ⑩ 空はれて梢色こき月の夜の風におどろく蟬の一聲 風雅集
- ⑪ 無病之日不知無病之楽ヲ 病生シテ而后知ル無病之楽ヲ
- ⑫ 無事之日不知無事之楽ヲ 事至而后知ル無事之楽ヲ

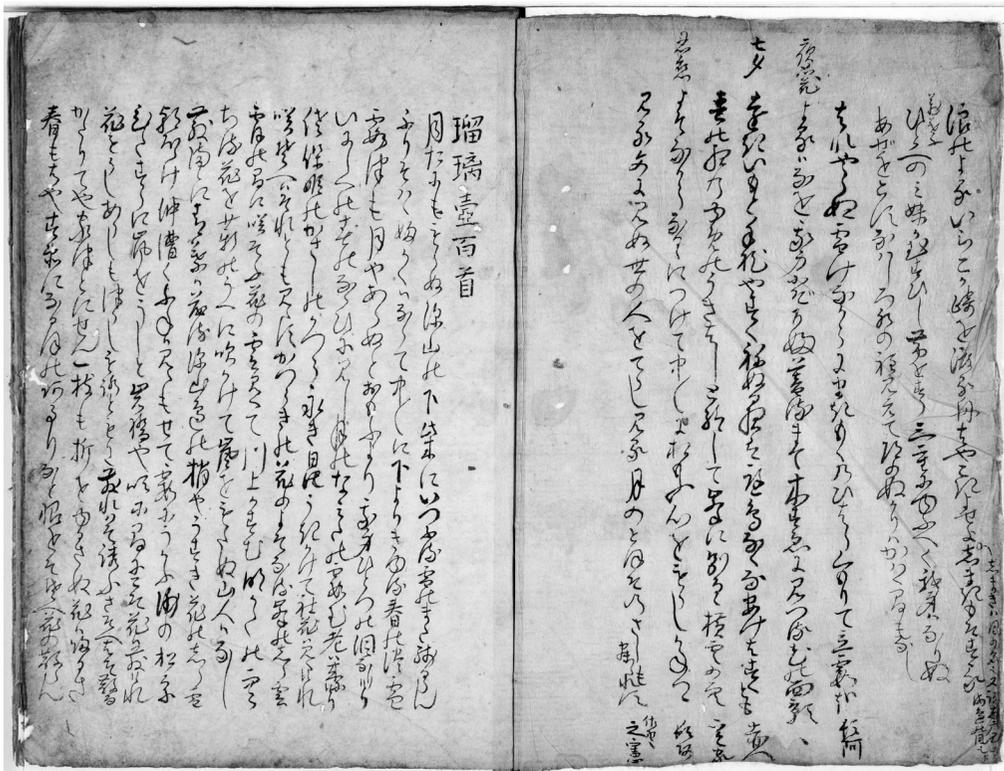
〔参考図版〕

1. 表紙



手銭家蔵『瑠璃壺百首』翻刻と紹介(野本瑠美)

2. 『瑠璃壺百首』冒頭(見返し・一丁オ)



三三三

〔付記〕

貴重なご所蔵品の調査・掲載をお許しくださった手銭家の皆様、調査にあたり様々にご教示を賜った手銭記念館学芸員佐々木杏里氏に厚く御礼申し上げます。

本稿は山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九～二〇二二年度、代表・田中則雄）、科学研究費補助金（基盤研究（C））「奉納和歌史構築のための基礎的研究」（20K00342 代表・野本瑠美）による研究成果の一部である。

“Ruritsubo-Hyakushu” in Tezen Family Archives : reprint and introduction

NOMOTO Rumi
(Faculty of Law and Literature)

[Abstract]

The purpose of this paper is to reprint and introduce of “Ruritsubo-Hyakushu” owned by Tenjin Family Archives. “Ruritsubo-Hyakushu” is one of the poetry anthologies attributed to Tenjin (Sugawara no Michizane).

Keywords: Sugawara no Michizane, Tenjin, the poetry anthologies attributed to Tenjin, hyakushu, Tezen Museum